実践民俗学提唱 第６弾

大麻栽培実験報告書

実践民俗学第6弾 「大麻の栽培記録」

麻栽培の目的　実践民俗学第6弾「麻の栽培」と「麻蒸し」の記録作成のため。
大麻栽培許可　昭和52年3月15日、「大麻取扱者免許申請書」を島根県知事に申請する。昭和52年4月2日、島根県知事から「大麻栽培者免許証」（認可）が下りる。
事 前 学 習　4月9日、大麻の栽培計画・取扱いについて研修会を行う。
大麻播種時期　昭和52年5月21日
収　穫　期　昭和52年8月6日（抜き取り・根切り）～7日（麻蒸し・皮剥ぎ）
栽 培 面 積　396㎡
栽 培 場 所　金城町波佐イ518番地
収 穫 収 量　10,500本
荒麻　65Kg収穫。
活 用 方 法　金城町民俗資料館で展示活用を図る。
記 録 写 真　動体写真を民俗資料館に展示して資料と共に後世に伝える。
※　麻をテーマとした民俗資料の荒麻、扱き麻、麻糸、麻織物など加工する民具が存在する中、栽培から麻蒸し作業までの工程を民俗学的な資料として補完するために実施したものである。

西中国山地民具を守る会

麻畑の畝たて作業

種まき後の生育状況

畝蒔きの生育状況

播種間隔の模様

生育状況

麻抜き取り作業の模様

抜き取り作業状況

抜き取りの状況

大麻の収穫の模様　　昭和５２年８月６日

大麻の抜きとり作業と押切による根の切断作業

２、３本まとめて引き抜く

根本を揃えて一か所に置く

総がかりで麻抜き取と根切りを行なう

根本を押切で切り落とす

根を切り落とすと小束に2か所結ぶ

作業風景

麻2、3本を一度に押切で切り落とす

麻の根の土境いに虫が寄生する

麻の根に寄生する幼虫

麻の根を押切で切り落とす

根を切り落とした後の麻を小束に結んで運ぶ

小束を一定方向に向けてまとめる

まとめた麻を大束に3か所を束ねる

２人がかりで大束に結ぶ

４、５人で麻を立てる

麻蒸しの釜

釜の上に組手を乗せる

麻の小束を集めて大束にする

組手の上に麻を立てる

釜の上に麻を立てた様子

屋外で跳ね木にて麻こしきを吊上げる

小束を12束まとめて大束にする

大釜の上に麻の大束を立てる

はね木でこしきを吊り上げて下す

麻をへこの上に立てる

立てた麻を垂直に直す

立てた麻の周りにへこを巻く

こしきを吊り上げる

こしきを垂直に下す

麻にこしきを被せた状態

蒸し上がった麻を取出し川の水に
浸けて荒皮を剥ぐ

麻の根切りと葉打ち作業

浜田市金城民俗資料館

麻栽培から麻織物に関わる聞書き

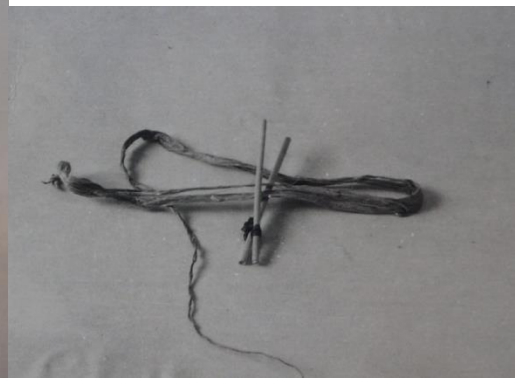
【麻関係の用具】

鍬（四つ子ぐわ、鉄ぐわ、唐ぐわ）＝麻畑の耕耘と管理に用いる。
鎌＝麻畑の周辺の草刈り作業に用いる。
肥負いこ＝堆肥を運搬するに用いる。
押切＝麻を根ごと引き抜き、根の部分を一握りずつまとめて切断する。
麻葉打ち＝麻の枝に付いている葉っぱをこの竹で打ち落す。長さ2尺以内、経3cmの竹。中ほどから先端を斜めにそぎ落としたもの。
麻こしき＝麻を大束にして組手（くもで）の上に立て蒸す。長さ2.7m、径95cm。
こしき引綱＝こしきを跳ね木に結びつける。長さ9.2メートルの藁縄。

麻葉打ち

麻こしき

こしき引綱


苧こぎ箸

いい縄＝直径30cmの小束にしたものを「こしき」の大きさに5～6束合わせて大束にする。

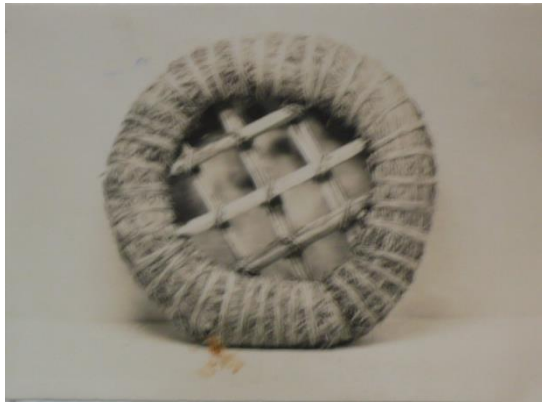
跳ね木（はねぎ）＝天秤式に「こしき」を吊上げる用具。「はでご」を使用する場合もある。

平釜＝麻蒸しの湯立てるために用いる釜。

組手（くもで）＝平釜の上に井桁に組んだ組手を載せて麻の大束が平釜に落ち込まない役目。

へ　こ＝組手の上に立てた麻と「こしき」のすき間が塞がる様に麻の大束に巻きつける。

平釜



組手

へこ

苧こぎ箸（おこぎはし）＝ニガ竹、矢竹などで作る。荒麻を川に浸し、水の中で荒麻を挟みすこぎ荒皮を取り除き扱ぎ麻にする。

木地膳（きじぜん）＝績み麻を木地膳の上に乗せて、手で水を振り掛けて糸車で紡ぐまでの入れ物として使用。

苧桶（おぼけ）＝麻糸を績みたぐね込み貯える入物。径27cm、高さ21cm。桜の皮製。

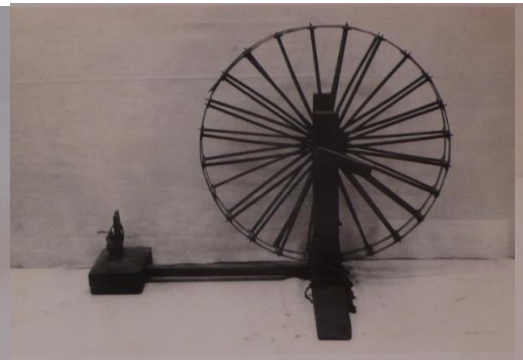
糸　車（いとぐるま）＝麻糸に撚りをかけるときに用いる。

カ　セ＝紡いだ糸を管から、このカセに巻き取る。

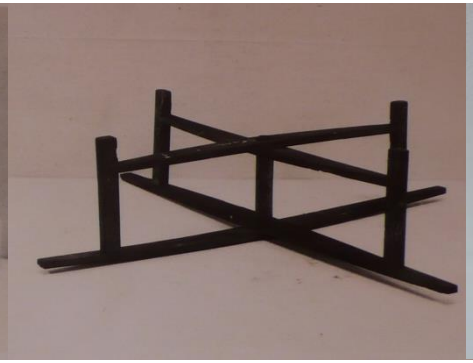
千切り（ちきり）＝整経した経糸を中程の棒に巻いておき、織れるにしたがって経糸を送り出す。

すいし＝織り上げた布巾を保つため布の両側に「すいし」を弓状に張る。

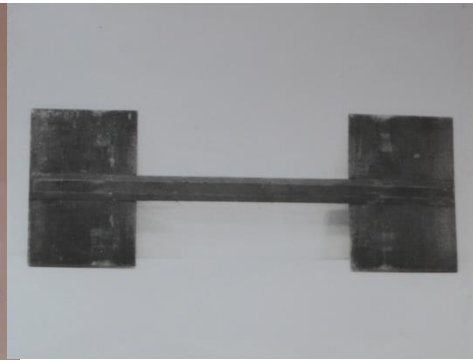
おぼけ



糸車



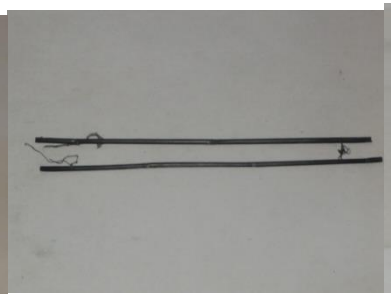
カセ

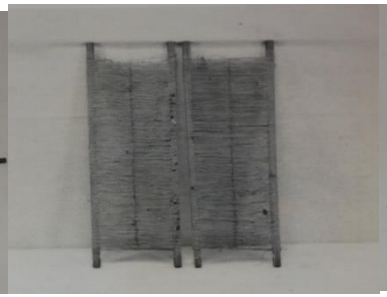


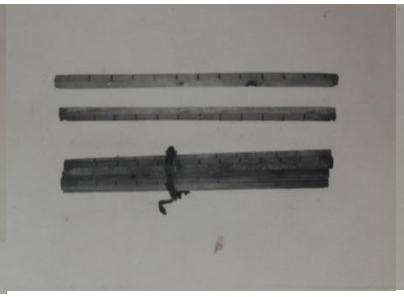
千切り

荒おさ（あらおさ）＝筬に経糸を通す前に、この荒筬の一つ目に4～5本ずつ糸を通して経糸を整経して筬に通す。
飾り竹（かざりたけ）＝経糸の道を整える。
中じきり（なかじきり）＝まね木を引く（足紐）と中じきりが上下に動く。
目開け竹（めあけだけ）＝目開け竹を2本差して糸の口を開ける。
飾りかばち（かざりかばち）＝飾りかばち2本を用いて飾りを作る。
飾り（かざり）＝経糸を上下に分けてサイの通る道を開ける道具。
飾り引き（かざりひき）＝飾りの下側に取り付けて、踏木を左右の足で交互に踏むと飾りが上下に動き、サイの道を開く。

荒筬

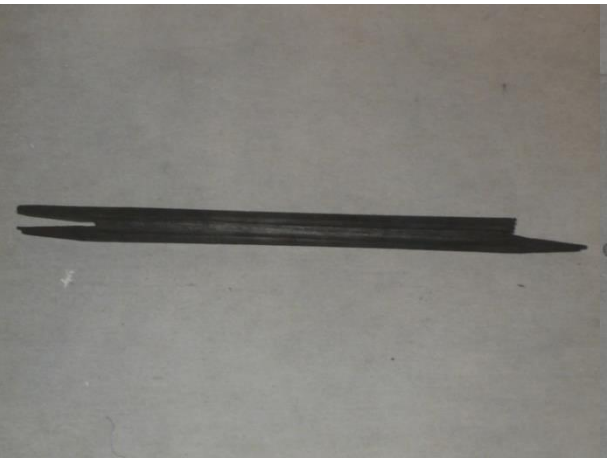

飾り竹


飾り

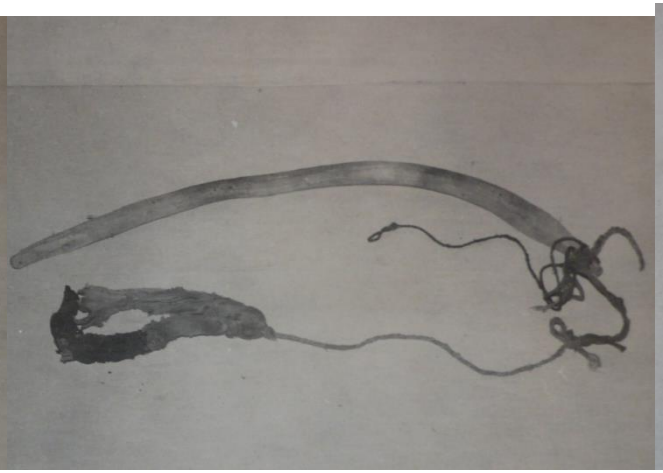

飾りかばち

飾り引き

筬（おさ）＝高機では緯糸を打って締めるに用いた。地機では経糸を整えるに用いる。
筬かばち（おさかばち）＝筬をカバチの中に納めて用いる。
筬通し（おさとおし）＝筬に経糸を通すとき使用する。
おご＝地機で織ったものを2本の棒に挟んで巻き織女の腰に結んでおく。
腰ばけ（こしばけ）＝腰ばけを織女の腰に当て「おご」を結び、地機の縦糸を引っ張る役目。
まねき＝足で紐を引くとまねきが動き、経糸を引き上げ、サイの通る道をつくる。



おご



まねき

腰ばけ

さ　い＝緯糸を巻いた管竹を入れて、経糸の開いた間を緯越させ、緯糸の打ち込みに用いる。
高機用のさいは、緯糸を巻いた管を入れて、経糸の開いた間を左右の手から手へ投げて織るに用いる。

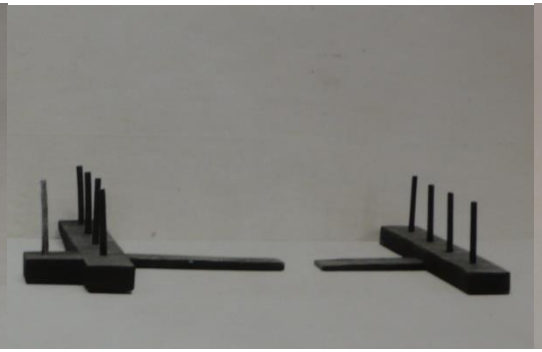
時計カセ台＝管からカセに糸を移すときに使用する。80回カセを廻すと中の木がせり上がりコトンと落ちた音で知らせる。

トンボ＝糸をカセからトンボに取り枠に移す。麻糸、木綿糸を経糸とするものはカセから外して糊を付けて干してから、このトンボにセットして枠に巻き取る。

木綿枠＝トンボ（まわるは）から、枠に糸を移す。紙糸、麻糸は、この枠のままで経る。

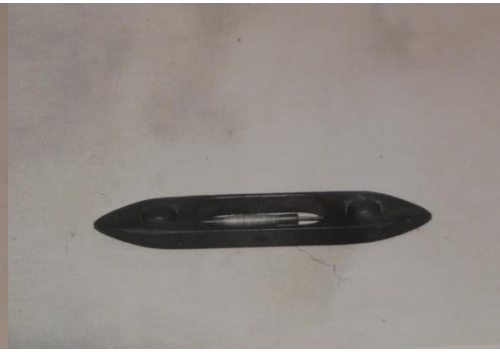
枠台（わくだい）＝木綿枠を枠の軸に通して巻く。

トンボ台



綜　台

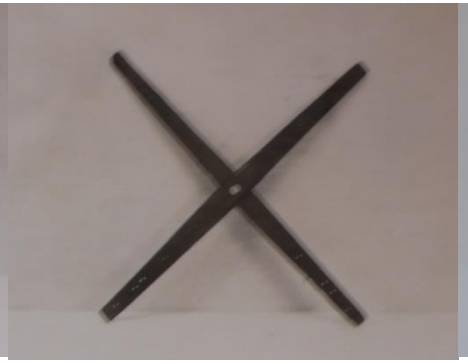
さい（地・箱機用）



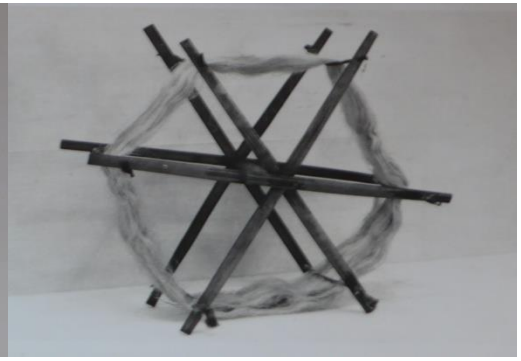
さい（高機用）

まわるは＝カセから糸を移す時に使用。
まわるは台＝まあるはの穴を台の上部の棒に差し込み糸を巻き取る。
とんぼ＝糸をカセからトンボに取り枠に移す。麻糸、木綿糸を経糸とするものはカセから外して糊を付けて干してから、このトンボにセットして枠に巻き取る。
とんぼ台＝上部に軸をはめてトンボを廻す。
綜　台（へだい）＝必要な本数の糸を纏めた管立から両端の棒から棒へ行き来して布反分の経糸を整える。

カセ台


まあるは

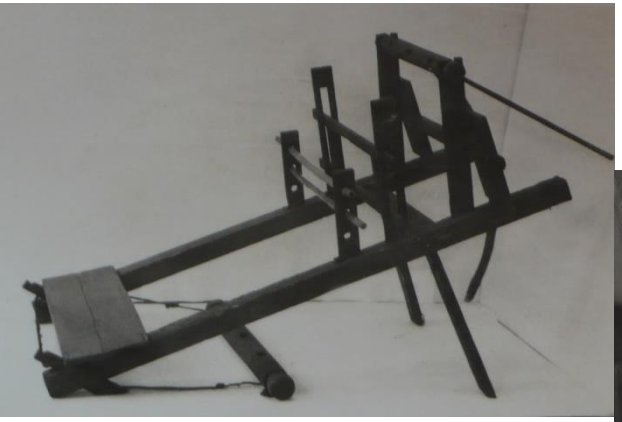
まあるは台


トンボ

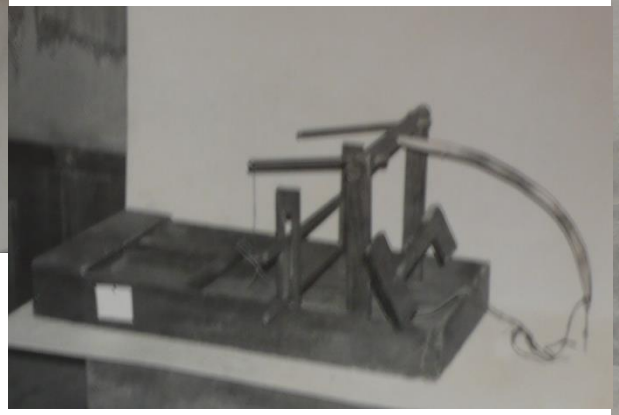
地　機（じばた）＝木綿、紙布、麻布を織るに用いる。飾りを足縄で上げて、長いサイで打ち込んで締める。

箱　機（はこはた）＝木綿、紙布、麻布を織るに用いる。飾りを足縄で上げて、長いサイで打ち込んで締める。

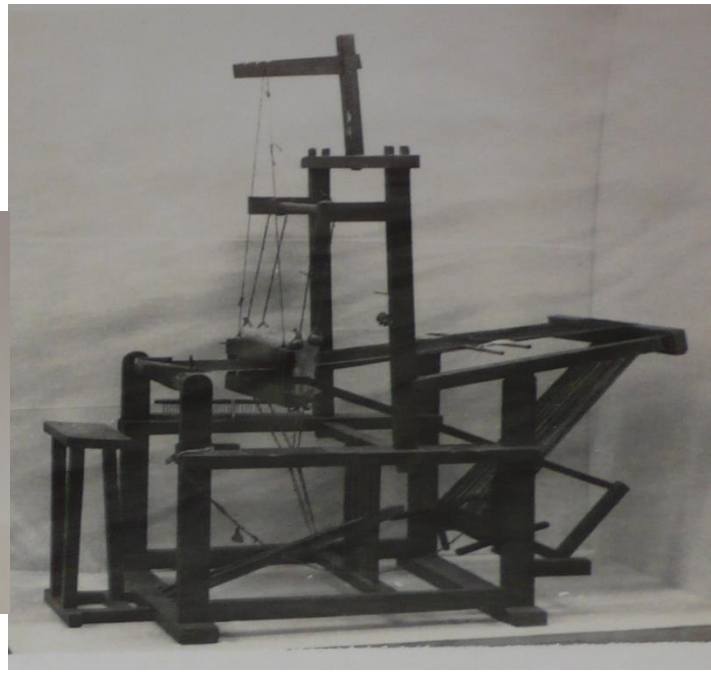
高　機（たかはた）＝木綿、紙布、麻布を織るに用いる。飾りが踏木で開かれ、サイを用いて左右交互に通して織る。



地　機



箱　機



高　機

【蒸し方の方法】

桶蒸し法＝「こしき」による桶蒸し法。ユイ講で大人数の作業員を必要とした。

蒸籠蒸し法＝箱蒸籠式のため一家族で作業ができるメリットがあり終末期に利用された。

石焼蒸し法＝河原石を焚火で焼き、ムシロを水に浸し、石と燠の上に被せ、麻の小束を積み重ねて、藁やムシロを上に掛け焼け石に水を掛けて、蒸気を発生させて蒸す。

※波佐地方は、上記の3通りの方法で川端の近くで麻蒸し作業が行われていた。昭和25～26年頃まで行われていた。

【麻畑について】

　波佐地方の農家では、江戸時代文化１１年の記録によると、麻畑１町３反５畝２歩（租税９石４斗５升４合３勺）の麻栽培を行ない各農家で麻畑を２～３畝歩を保有していた。現在でも地名として麻畑という地名が多く残っている。

　各組内で「麻こしき」を所有しており、４～５軒が共同で麻蒸し作業を行っていた。ちなみに、楮畑は５４町４反５畝１７歩であった。

【麻繊維の名称】

荒麻（あらそ）＝蒸して皮を剥ぎ乾燥させたもの。

麻がら（あさがら）＝菜台の「かがり箸」、夜道の「かがり火」、竈の焚きつけ、屋根葺用下材などに用いる。

麻がす（あさがす）＝麻の皮を剥ぎ苧こぎ箸でこすぎ、「こすぎ麻」に仕上げた残りかす。土唐臼のすさとして用いた。土蔵の壁土用の「すさ」に用いる。

扱ぎ麻（こぎそ）＝荒麻を灰汁で煮て小川で苧こぎ箸で、すこぐと塵が除かれ、綺麗なこぎ麻となり、これを績むと績み麻となる。

績み麻（うみそ）＝口にくわえて糸になるぐらいに分けて継ぎ目を撚って績み麻にしたものを糸車で撚りをかけて麻糸にする。

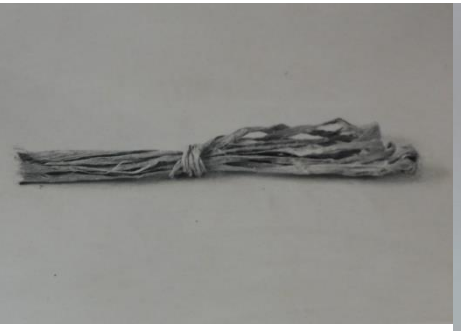
荒麻

荒麻

麻がす

麻糸（あさいと）＝扱ぎ麻を績み、糸車に掛けると麻糸が出来る。つづりの経糸、はばき編み用の糸。豆腐袋、畳の縁、米袋などの材料として用いる。

つづり縦糸（つづりたていと）＝①つづりの縦糸として使用。②稗糊を付けて、小ヒゲを引っ付けたもので、つづりの縦糸として用いる

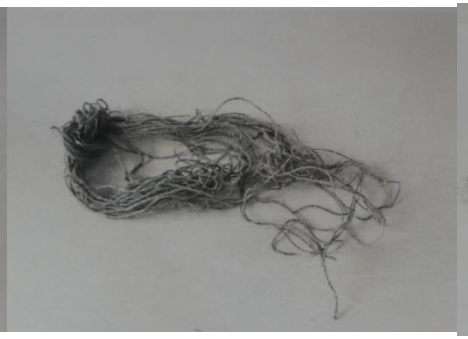


こぎ麻

うみ麻

うみ麻

麻糸



はばき編み用の麻糸

つづりの縦糸（麻）

【麻栽培の歴史】麻の栽培は、津和野藩では文化１１年『萬手鑑』の記録によると１町３反５畝２歩の作付に対して9石４斗5升４合３勺の年貢米が課せられていた。明治６年『田畑屋敷改正地引帳総寄』の記録によると麻の栽培面積１町４反２４歩であった。農家にとっては、牛の手綱、米袋（１斗、２斗、3斗入り）、夏じゅばん等に麻の繊維は必需品であった。各全農が２～３畝歩の麻畑を所有していた。

【麻畑】江戸時代は、畑の作物は、楮栽培が主流で５４町４反５畝１７歩が「楮畑」と呼ばれた。麻栽培は、「麻畑」として、限られた畑のみに栽培された。

【麻袋】縦糸は節の無いものを上手に苧んだものを使う。横糸は少しは雑に苧んでも良いものを用いて織る。

【麻布】縦糸の撚りは良く掛ける。横糸の撚りは弱く掛ける。縦糸は稗糊を使用して滑りを良くした。

【紙布】経糸は、管に取って、４尺カセに掛けてヒビリを作り、枠に取り、経る。横糸は、管からサイ用の管に移す。経糸の織り前部分を水分で少し湿らす。

【木綿布】経糸は、米を煎ったものを粉に挽き糊として糊引きして経糸の滑りを良くした。

【かすり織り】経糸は、紺色に染めて使用した。明治初年頃から明治中期まで。

【絹布】

【養蚕】明治２０年代から大正末期が最盛期。艶出しをしないものを菅糸といい、紺屋で染めた。艶を出したものは「絹しま」という。

麻蒸し作業（天秤式撥ね木でこしきを上げ下ろしする。

蒸し上がった麻を水辺まで運ぶ

水に浸し皮を剥ぎやすくする

抜きとり作業の模様

麻の抜き取り作業風景

麻蒸し作業

「こしき」天秤で吊り上げる

引き綱を引っ張り「こしき」を吊り上げる

完
西中国山地民具を守る会